

中世英語写本文献の校訂

Editing Some Middle English Devotional Writings

田 口 ま ゆ み

Mayumi Taguti

研究成果の概要

私は1994年以来、Cambridge大学Magdalene College図書館所蔵Pepys 2125写本のテキスト校訂を手がけてきました。実際に現地に出かけて写本を確認する作業が必要なため、分野別研究費の交付を受け、写本の確認作業を行うことができました。

以下、期間中、及びその後に発表に結びついた成果の概要を記します。

1. “Easter Sermon in MS Pepys 2125,” 大阪産業大学論集 人文科学編 101号(2000, 6)、pp. 1-14.

MS Pepys 2125, item 50 Easter Sermonは未刊行の作品であったため、校訂、刊行を目指して研究を続けている。今回の発表では、Pepys写本におけるテキストの校訂のみを掲載しているが、今後は、BL MS Harley 2398, Oxford, MSS Bodley, Hatton 96, Laud misc. 210に掲載の同文献(手で書き写した文献であるため、写本文献は1本1本必ず異なる)との比較を行っていく。

2. 『中世末期英語宗教的写本文献について：MS Pepys 2125 item 3 「悔い改めについて」を中心に』、大阪産業大学論集 人文科学編 107号(2002, 6)、pp. 1-22.

1215年の第4階ラテラノ公会議で改悛の秘蹟がつくられ、全キリスト教信者に復活祭前の告解が義務づけられた。その結果、改悛の秘蹟を行うための教育が聖職者と信徒の両方に対して全ヨーロッパ的に展開し、書物・文献が数多く作成され、流布した。こうして中世末期に作成された英語文献を主体とする写本は、ほとんどが基本的宗教文献を含むアトランダムなコンピレーションである。収録された文献の大半は、信仰生活の基本的な道しるべとなるべきものである。そのうちの多くは、未校訂のまま残っている。

本稿では、Cambridge大学Magdalene コレッジ、Samuel Pepysの蔵書のうち、中世写本2125番に収録されているitem 3 “Dimitte me, domine,” 「悔い改めについて」を中心に、同写本に収録されている文献の特質と、写本が作成された対象・読者について、題材、スタイル、イメージ・比喩、ジャンル、句読法、などの視点から論じている。

3. その他、上記Pepys写本に含まれるitem 12 “Teaching of St Barnabas”を題材に、写本文献の特性、文学研究における写本文献の重要性について国内学会での発表を行った(2001, 12)。また、日本における中世宗教文献の研究について、国際学会での討論にスピーカーとして参加した(2000, 7, 2001, 7)。